

二〇二二年九月一日

蜘蛛の囀に透けて遙けし甲山
秋あかね飛行機雲の空高く
岩桔梗一輪なれど藍濃ゆし
メダリスト迎へ祝福郷の秋
峠より見ゆ里やまの稲筵

二〇二二年八月三十一日

鈴虫の音を枕とす夢路かな
秋夕焼背なにしてつく家路かな
一人居の心おきなき虫の闇
秋麗の穂高一朶の雲もなし
海に立つ風力発電風白し
過去帳に子の名を記す秋の夜
天空へ続く木道大花野

二〇二二年八月三〇日

日焼け顔なれど双子と分かりけり
夜もすがら鈴虫輪唱くりかへし
マツサージ至福の時や夜の秋
吟行す疎水の道の風は秋
旧道といふはあぜ道秋遍路
風の萩池塘の道へなだれけり
つくつくし下山の僧の一人に
露ふふむ朝とれ野菜無人店
秋暑し数珠なすタクシー黒ばかり
穂高嶺を映して池の澄めりけり

二〇二二年八月二十九日

バス停の標を虜葛かづら
老い吾もラジオ体操朝涼し
秋草を数えつつゆく里の道
網の上に全長のらぬ秋刀魚かな
法師蟬途切れがちな亭午かな

うつぎ

雅流

はく子

こすもす

よし子

菜々

つくし

うつき

はく子

有香

あさこ

はく子

なつき

菜々

あさこ

満天

よし子

こすもす

雅流

宏虎

うつき

はく子

こすもす

ともえ

さつき

わかば

うつき

秋天を突く槍が嶺の勇姿かな
小祠に揺るる一燭露けしや

二〇二二年八月二十八日

白壁のタトウとなりし守宮かな
爽やかやサリを風になびかせて
日の温み宿すいちじくもぎにけり
ロールパンめきて捻れし秋の雲
夕河原吹きぬけて来る風は秋
作業着の背に貼り着く残暑かな
止め石の奥に展けし萩の庭

二〇二二年八月二十七日

うち仰ぐ一万尺の花畑
明けゆくに雲脱ぐ穂高秋澄める
黎明や間遠となりし虫の声
ベランダの空肅々といわし雲
明日刈らむ早稲の一穂を手計りに
西瓜切る正座の子らが侍りけり
白服のはち切れさうな胸ボタン
厨房に立ちて汗だく妻の留守

二〇二二年八月二十六日

山壁の陰濃く秋の澄めりけり
底紅の咲き継ぐ庭や恙なし
苦瓜の一つ高きに残りをり
秋茄子を焼きて一献酌交はすべし
雨晴れて瀬音高鳴る下り築
マンションに隣るお堂や地藏盆
能勢路いま棚田をわたる早稲の風

はく子

菜々

うつぎ

さつき

あさこ

こすもす

わかば

三刀

なつき

はく子

はく子

せいじ

ぼんこ

雅流

宏虎

なつき

せいじ

さつき

満天

あさこ

百合

よし子

菜々

雅流

毎日句会みのる選・二〇二二年九月三日